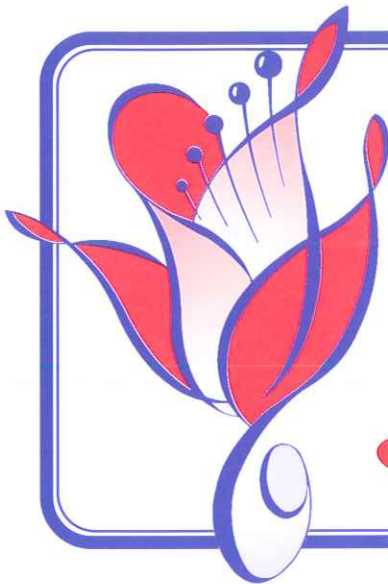


自分自身を愛するように隣人を愛しなさい。(レビ記 19-18)  
人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。(マタイ 7-12)



# ひびきあい Hibiki Ai

聖ヨハネ学園だより

発行：聖ヨハネ学園 〒569-1032 高槻市宮之川原2-9-1 TEL&FAX072-687-0548

## 北欧の街見聞記



監事 真庭 功

的に結びつける交通システムに要約される。ストックホルム総合計画でシエルホルメンニュータウンの基本構想が発表され、自己維持的周辺都市地域の創造がテーマとなった。

この自然環境豊かな街は七二年に完成した。面積は一六〇鈔(東京ドームの三四倍)、居住人口3万8千人、住宅戸数一万六千六百九十戸(戸建一四%、中高層八六%)、交通機関はすべて立体交差、生活空間は歩行者優先、商業施設は人工土盤で、人と車は完全に分離され、エレベーター、エスカレーターがある。

主要公共施設は、小中学校、高校、中でも託児所二〇三三所と充実している。デパート、専門店、レストラン&カフェ、銀行、郵便局、サービス施設も充実。社会施設もヘルス・サービスと警察、ホテル、一日託

児所がショッピングセンターにもあった。文化施設には体育館、公共図書館、レクリエーション活動、プール、教会など。駐車施設は北欧随一の立体駐車場。その他となっている。

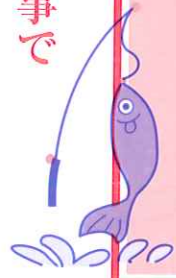
住宅の家賃は三〇年返還で、工場労働者の平均所得は月二五万円で、住宅費が二五%、税金が三八%を占めている。低所得者には住宅家賃補助として家賃の四分の一が補助される。設備は冷暖房完備、乾燥機、冷凍冷蔵庫などがあり、当時の日本の公団住宅より高級であった。例えば3DK(81㎡)640クロ  
ーネ(四万千円)。  
老人優先住宅には七五%まで老人を優先的に入居させ、若い世代との交流を計っている。  
四〇年前とは  
言え、福祉の心の豊かさを見習いたいものです。



大阪万博が一九七〇年に開催されてから四年後のこと、生活環境整備欧州視察団に加わって、ストックホルム市(スウェーデンの首都)を初めて訪問した。六月は気候もよく、市庁舎はノーベル賞の記念晩餐会が開かれることでも有名。  
スカンセンは郊外に浮かぶ島にある野外博物館で、十九世紀末にハゼリウスにより次代を担う子どもたちのために歴史と文化を語り継ぐ遊園地となっている。わが国の明治村はこれをモデルにしています。  
戦後の都市計画の特徴は①郊外住宅都市の開発②都市部の再開発③両者を有機



## 聖ヨハネ学園



### 招待行事で いろいろな体験!

聖ヨハネ学園はたくさんの方のご協力により、子ども達はもちろん、職員もいろいろな体験をさせていただいています。

新学期が始まり、緊張しながら学校へ通う子ども達。そんな中、休日に釣り、イースター祭と毎年楽しみにしている行事に招待していただきま



4月4日、マス釣りに招待して頂き、聖ヨハネ学園からは10名の男の子が参加させて頂きました。この招待は3年前から声をかけていただき、毎年、子ども達が楽しみにしている招待の一つです。学園の子ども達も釣り初体験、生きた魚に触った事がない子が参加し、興味津々でした。経験がなくても、各場所に釣具共同組合の方が親切に指導して下さるため、子どもも、職員も安心して楽しむことができました。子ども達からは「釣れたで!」「釣りっておもしろいな!」「魚触れた!」と時間も忘れて大興奮でした。釣った魚を持って帰り、厨房にお願いして、夕食に「マスの塩焼き」を作ってもらいました。この時だけは魚嫌いの子どもも、おいしいと言って食べています。自分で釣って食べる魚は格別なのでしょう。

4月5日は大阪聖ヨハネ教会のイースターに参加しました。当日は雨でしたが、楽しいことをする時は気になりません。電車やバスに乗れるこ



とも子ども達にとってはイベントの一つです。教会に到着後は礼拝に参加します。ゲーム大会に心をワクワクさせながらも、行儀良く参加できました。待ちわびたゲーム大会では紙飛行機を遠くまで飛ばす競争です。竹林チャプレンのお心遣いで、礼拝堂の二階から飛ばしました。高い所から自分の作った紙飛行機を眺める事はめったに出来ない体験になりました。また、消防署にいき、たまごと花束の贈呈を行いました。消防士さんとの交流も楽しみの一つです。

## 下田部保育園



### こいのぼりフェスタ

第24回こいのぼりフェスタ1000が、「こいのぼりに夢をのせ全力で駆け抜けよう」のスローガンのもと開催されました。下田部保育園では、年中・年長組の子どもたちが真っ白の大きなこいのぼりに、自分の絵を描いたり、小さなこいのぼりを描いたり手形をしたりなど毎年工夫し様々なこいのぼりを作っています。制作段階では、大きなこいのぼりに驚きながらも、それぞれが思い思いに描き楽しく制

学園に戻ってくるなり、紙飛行機大会や消防署等の話をする子ども達の笑顔が楽しかった事を物語っていました。たくさんの方の支えの中で貴重な体験が出来ることを心から感謝いたします。



作に取り組んでいます。子どもたちの想像力豊かな表現により今年も素敵なこいのぼりを作ることができました。

自分たちで作ったこいのぼりを見に、芥川の桜堤公園までバスに乗って遠足に行ってきました。

4月に進級して初めての行事であると共に、バスに乗って行く遠足ということで子どもたちは、とても楽しみにしていました。会場に着くと、

気持ち良さそうに青空を泳ぐたくさん大きなこいのぼりに大興奮の子どもたち。たくさんこのぼりの中から自



分たちで作ったのを見つけると「あったー」「見つけたー」など、子どもたちの嬉しそうな声が聞かれました。公園内

を散策している時には、大きな声でこいのぼりの歌を唄いながら歩く子どもたち。「黒いこいのぼりはお父さんやで、

「あの小さいこいのぼりは子どもや」などの会話も聞かれました。また自分たちの作ったこいのぼりをバックに、写真も撮りました。

その後は川原や、公園の遊具でたくさん遊びました。普段とは違う環境の中で遊ぶことができ、子どもたちの目は



キラキラと輝いていました。最後には、大好きなおやつをみんなで食べて保育園に帰りました。

保育園に戻ってからは、「楽しかったー」や「こいのぼりいっぱいやったー」などと笑顔で話す子が多く、とても良い思い出になったようです。後日家族と一緒に行った子もいたようで、その時の話を嬉しそうに教えてくれました。

## ミス・ブール 記念ホーム



### ボランティア感謝会

当施設では傾聴ボランティア様、書道や合唱ボランティア様、喫茶のボランティア様など一年を通して多くのボランティア様にお越しいただいています。当施設ではご利用者様がその人らしく生活を送れるよう職員一人ひとりがその人にあったケアを考え、介



護サービスを提供させていただいています。ボランティア様の活動による支えがあってご利用者様の生活がより豊かになっております。日頃お世話になっておられるボランティア様に感謝の意を伝えるべく2月22日(日)恒例のボランティア感謝会をデイサービスフロアにて実施いたしました。

当日は、お忙しい中にも関わらず多くのボランティア様にご出席いただけました。交流のきっかけとして、ゲームなども実施させていただきましたが、ゲームに和気あいあ





いと参加され会場は大盛りあがりとなりました。

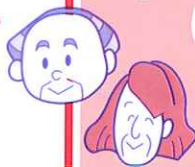
ボランティア様のクラブ活動を楽しみにされているご利用者様も多く、クラブ活動の際は笑顔がこぼれ、真剣な表情で参加されている様子が見られました。このように皆様の活動は当施設では欠かせないものとなっております。ボランティアの皆様の日頃のご活躍に心より感謝を申し上げますとともに、これからも末永くお付き合い宜しくお願い申し上げます。

当施設では、ボランティア様のクラブ活動以外にも季節に応じて様々な企画を実施させて頂いておられます。昨年の秋から冬にかけて恒例の運動会やクリスマス会を実施したのに加え、新たな取り組みとして、職員が獅子舞に扮しご利用者様のところへ訪問させて頂きました。獅子舞を前に昔を思い出され喜ばれていました。また、獅子に頭をガブリ！と噛まれ無病息災をお祈りしたご利用者様もいらっしゃいました。また、

今年に入ってから初詣を実施し、4月には当施設の中庭で桜の花見も行いました。

当施設では、恒例の行事を大切にしつつもご利用者様がかがやくために例年ない取り組みを今後も企画及び実施して参ります。

## ゆう・あい センター



### 冬のふれあいデー

1月10日(土)、寒さはありませんが天候に恵まれ、冬のふれあいデーが始まりました。

『高校生がつくるふれあい冬まつり』も同時開催し、市内高校生たちが行うクラブ活動紹介を兼ね、ダンス・和太鼓・吹奏楽などの展示発表の場になっていきます。

高校生以外にも福祉団体やボランティアの手話コーラス、ヘルマンハープ演奏などがありました。出店は高校生が販

売するうどん、茶道部のお茶・お菓子、うどん、パスタなど、市内の作業所からは手作り小物などの雑貨、焼きそば、クッキーなどの食品販売がありました。

ゆう・あいセンターからはぜんざいを提供しました。ぜんざいに入れる餅は、ゆう・あいセンター玄関前でつく餅です。餅をつきたい子どもの姿が多く見られ、ペタリペタリと楽しそうにつきました。

さらに今年はずんざいの他、うどん餃子も出してみました。うどん餃子はみんな知っているのではありません。心配しつつ準備。ところが予想以上の評判(?)に職員はうれしい悲鳴で、必死に焼いた餃子はあっという間に無くなりました。

ゆう・あいセンター近くの野見神社は戎さんの神事があり、参拝前後に来館される方もおられ、にぎやかな一日となりました。





## うの花療育園



### こいのぼりフェスタ

4月6日(月)に入学・進級式を終え、新しいクラスがスタートしました。始めは緊張した表情を見せていた子どもたちも、約1ヶ月が経過し、自分の好きな遊びを見つけて、元気いっぱい遊ぶ姿を見せてくれています。

4月後半から5月始めにかけて、芥川桜堤公園で開催されたこいのぼりフェスタを見に行きました。天気にも恵まれ、全クラスが約1000匹の元気に空を泳ぐこいのぼりを間近で見ることが出来ました。

新年度に入り、初めての戸外活動で、保護者の方にも一緒に参加していただきました。バスでやってくる子どもたちをスタッフと一緒に現地受け入れ、楽しい活動がスタート

しました。バスを降りてすぐに、たくさんのこいのぼりをバックにクラスで記念写真をとりました。子どもたちは広い公園を目の前に写真よりも遊びたい気持ちがいっぱいの様子でしたが、「ハイ、ピース」のかけ声に答え、カメラに向かって素敵な表情を見せてくれました。

自由行動では、親子で広い公園を走ったり、河川敷で石を拾ったり、橋を渡って少し遠くまで探検にいたり、川に入って遊んだり；それぞれが好きな遊び方を楽しみ、たくさんの笑顔を見ることが出



来ました。新年度を迎えて間もない子どもたちですが、生き生きと遊ぶ姿を見て、保護者の方からは「たくさん遊ぶ姿を見て、成長を感じました。」「子どもより私の方がドキドキしていましたが、一緒に参加して良かった。」と嬉しいお言葉をいただきました。

自由時間はあっという間に過ぎ、まだまだ遊び足りない様子の子もたち、一方で保護者の方は子どもたちのパワーに圧倒され、少しお疲れのご様子でした。バスが迎えに来ると、大勢のこいのぼりと保護者の方に見送られながら、うの花へ帰りました。帰りのバスの中では、子ども達から「楽しかった!」「また行く!」等、嬉しい言葉を聞く事ができ、スタッフにとっても貴重な経験になりました。

これから、うの花療育園ではたくさんの行事があります。1つ1つの活動の中で子どもたち1人1人が貴重な経験や小さな成長を積み重ねることが出来るよう、働きかけていきたいと思えます。

## 地域生活支援 センター光

### 食事のたのしみ



光では、正月、節分、ひな祭りといった四季折々の行事に合わせ月に一度季節の味を提供するなど、食を通じた楽しみをご利用者を感じていただくとための取り組みを行っています。お花見や運動会の時期には食事がお弁当箱に盛り付けられたり、クリスマスにはサンタの衣装をしてケーキを食べたりするユニットもあります。特別食には他にも、誕生日を迎える方からのリクエストが施設の昼食になる誕生日メニューや、ご利用者が



集う懇談会で希望を募るバイキングなどがあり、ご利用者のニーズに合わせ食べたいものを提供する機会を積極的に設けています。

5月5日、端午の節句のメニューはネギトロ丼でした。これ選ばれた背景には、人気の刺身であるという点に加えもうひとつ、全てのご利用者がほぼ同じ形態の食事をとっていただけ、という理由があります。様々な身体障がいのある方が利用されている光では、地下の厨房で調理された食べ物の細かさを8段階



に分け、ご利用者それぞれに応じた食事形態で提供しています。細くなるほど失われてしまいがちな「見て味わう」楽しさを、食事形態によらず共有していただきたいという願いがこめられたメニューです。そうはいかない普段の食事では、盛りつけ方を工夫し、刻んでいない分を見ながら献立を紹介するなど、できるだけ食の楽しみを損なうことのないよう取り組んでいます。

ところで、食事の楽しみといえ、時に「何を食べるか」以上に大切となるのが「誰と、どんな雰囲気食べるか」ではないでしょうか。光のご利用者も職員もお話好きな方が多く、笑いに包まれる食事の時間はどのユニットでも大切なコミュニケーションの場となっています。特にバイキングの際は面会に来られたご家族にも一緒に召し上がっていただき、ご利用者、ご家族、職員が一つのフロアで同じ食事をとりながらお話しする欠かせない交流の場となっています。障がいの程度から言葉

によるコミュニケーションが難しい方も、明るい雰囲気を感じ取っておられる様子で、食事の際は笑顔や拍手を見せて下さることが多くあります。

3月に創立8年を迎えた光ですが、まだまだご利用者と一緒により良いサービスを探り続けています。今年度は新たに栄養ケアマネジメントとして、食事に関する個別ニーズにより応えていくための取り組みも始める予定です。これからも、美味しく、楽しく、可能な限りご利用者それぞれの希望に応えた食事の時間を過ごしていけるよう取り組んでいきます。



「ここにいていいんだ」という安心感

聖ヨハネ子どもセンターでは、この春また新たな子ども



たちと保護者の方々をお迎えして、めばえ教室、コアラ教室がスタートしました。慣れない教室に不安を抱えた子どもさんや、お母さんの心配をよそに、楽しそうに走り回る子どもさんもおられます。

そんな時、ふと昨年度のご利用者の方からの感想を思い出しました。通う前は他のサークルでじっとしていられず、肩身の狭い思いをされていたお母さんが、「めばえ教室に来て、ああ、ここにいていいんだ」と思えた」と話されたことです。ことばの遅れや行動面に気になることがあるお母さんにとって、周りの子



どもと比べたり、他のお母さんからどう思われるかが気になって、外出が苦痛になったり、「ここにはいれない」と感じてしまう方もたくさんおられます。人は安心できる環境の中で初めて心が開き、成長のエネルギーが発芽するようには思われます。あるがままの自分が大事にされていて、こ

## 理事長の日々

理事長 野知卓司

今年の4月には、大阪で2つの歴史ある社会福祉法人の記念式があり、出席して祝意を表してきました。4月8日は四恩学園の創立100周年記念式、4月11日は博愛社の創立125周年記念式でした。住吉区の一心寺の横にある四恩学園は創立100周年記念事業としてグループホーム型の児童養護施設「四恩たみみず園」を建設し、その竣工式を兼ねて行われました。1915年(大正4年)に浄土宗大阪教区の一心寺を中核とし

ここにいいんだ」と思える安心感。自分の存在そのものを受け入れてもらっている、自分は価値のあるひとりの人間なのだ、という自己肯定感につながります。

それは子どもたちだけでなく、大人にとっても同様なのではないかと思います。保護者の方の気持ちに寄り

て宗教大学(現大正大学)出身の若手僧侶団によって四恩報答会が設立され、釜ヶ崎等市内7カ所で行った子供会活動が始まりとされています。その後釜ヶ崎地区でセツルメント活動を展開し不就学児童の教育、子供会、敬老会、児童相談所、授産所等を設立し福祉事業を多角的に展開してきました。その根底には「社会事業宗」ともいわれる浄土宗の思想、中でも「托鉢」の実践があったとされています。博愛社は1890年(明治23年)に小橋勝之助氏が若くして始めた学校や孤児院の事業が林歌子氏や弟の小橋実之助、カツエ夫妻に引き継がれ

添い、あるがままを受け入れることは、保護者の方の心に安心と余裕を生み、子育てにも余裕が生まれるように感じられます。

半年あるいは一年通われた保護者の方からは、「子どもなりの成長、ありのままを受け止めようと思った」、「子どもの成長を見守ろうと思う」

今日の総合的な社会福祉事業体となっています。創始者の方たちはキリスト教徒であり、当法人と同じく日本聖公会大阪教区に連なる社会福祉法人です。敷地内にある聖贖主教会で記念礼拝が行われ、近くのホテルプラザオーサカで盛大なお祝いのお催いされました。創設当時に関わりのあつ

といった声や、「気持ちが悪くなった」、「イライラが減り、余裕が持てるようになった」という声がよく聞かれます。

子どもたちが安心して発達の芽を伸ばせるよう、今年度もまた、「ここにいいんだ」という安心感、居場所作りからスタートしたい、と思っています。

た方々のご子孫がお集まりになり思い出をお話になったのが特に印象的でした。

両法人とも現在のように行政による福祉施策のない時代から始まり、運営費に事欠くこともあり、先の戦争での被害を含め多くの災害に遭い、大変な困難を乗り越えられた根底には、仏教やキリスト教に根差した不撓不屈の博愛の精神があったからだと思います。両法人が記念誌として出された冊子には、それぞれの歴史と共に職員の方々の思いが掲載されており、歴史の重さを感じる所からこれからの活動のモチベーションを語っておられます。





◎チャプレン室からのたより

食といのちと 信・望・愛

あこがれのカナダへ短期留学に出かけた大阪の良家の子女が、昼も夜もマクドナルド通いをしてる姿を見、そしてその発想と食生活の貧弱さに、ある方が愕然としたと言っていました。その国、土地、季節にしか口にできない物を豊かに味わい楽しむことに、思いが至らないという若者の危機は、日本全体で考えると、生命力・体力・気力・生殖力等の巨大で総合的な危機につながります。

20代、30代の多くの独身者が、朝は食べない。食べてもせいぜい菓子パンか中華饅頭にペットポトルの飲み物。昼はピザ1枚夜はラーメン。一週間に一度もお浸しや煮物を食べない「最低限、死なない程度」にしか食べない暮らしをしていると嘆いているのが、91歳の料理研究家の辰巳芳子さんです。聖ヨハネ学園を巣立っていった人たちは、今どこで、何を、どのように、

食べて生きていますか？

彼女は、「日本人が食べることに丁寧に向き合えなくなっているのは残念。」と言います。テレビでこれほどに、グルメ番組が流れている時代なのに、それは、「食」と「自分」と「いのち」の関係について、はつきりした認識を持っていないから、持つように育てていないからだ、と観察しています。戦後70年、「食べる」と「栄養の向上」が結び付き過ぎて、食べ物を「成分とカロリー」で捉える見方が浸透し過ぎたとも言えるでしょう。時間・プロセス・味わつ心を忘れて、数値・数量的な面に傾きすぎたのです。医療や看護の分野も同じです。

大事な本質的生命観は、小さな頃にきちんとした美味しさ、うまみ、苦さ、酸っぱさみたいなものを原体験として知ること、に根差すのだという考えは、辰巳さんのカトリック信仰からも

来ています。しっかり食べる経験の積み重ねが、頼れる自分のいのちへの気づきに導き、やがて何かを誰かを信じる力に昇華して、希望・愛へと仕上がっていくと語っています。「食」によって養われた「いのち」は、生物としてのヒトが、「信・望・愛」を秘めた人になることを目指します。

3月7日の「聖ヨハネ学園卒業生お祝いの会」に招かれ、18歳で学園を巣立つ3人の要望を込めた、食堂スタッフの心づくしの御弁当を感激していただきました。子供たちにすきな食事を毎日食べてもらい、成長してほしいという願い・祈りが、120余年の経験の蓄積・伝統の味となつてにじみ出ているのを実感しました。

辰巳さんは著書で、「政治、経済、学問、芸術、宗教、メディア、あらゆる分野の要人(リーダー)方は、20、30年先のアジアの人口増加、これに伴う食糧問題について、『生命観』を持って、方向づけを思索しておいてほしい。生命観は、この国に欠落している最大の課題であ

る。」と書いています。大きな宿題だと思つと同時に、聖ヨハネ学園出身者の中から挑戦者が出るのを期待しています。

\*参考図書：辰巳芳子著

「食といのち」(文春文庫)、「食に生きて」(新潮社)

聖ヨハネ学園チャプレン  
大阪聖ヨハネ教会 牧師  
ペテロ 竹林徑一

社会福祉法人 聖ヨハネ学園 (法人本部)  
〒569-1032 高槻市宮之川原2丁目9番1号 TEL&FAX 072-687-0548

- 聖ヨハネ学園 (児童養護施設)  
〒569-1032 高槻市宮之川原2丁目9番1号 ☎ 072-687-0541 FAX 072-689-3623
- 下田部保育園 (保育所)  
〒569-0046 高槻市登町1番1号 ☎ 072-671-9960 FAX 072-673-8039
- ミス・ブール記念ホーム (特別養護老人ホーム・デイサービスセンター・ケアプランセンター・ヘルパーステーション・高槻市委託事業/地域包括支援センター)  
〒569-1031 高槻市松が丘1丁目21番9号 ☎ 072-688-5138 FAX 072-688-4478
- ゆう・あいセンター (高槻市事業受託/地域活動支援センターⅡ型・委託相談支援事業)  
〒569-0075 高槻市城内町1番11号 ☎ 072-672-0267 FAX 072-661-3508
- うの花療育園 (高槻市指定管理事業/児童発達支援センター)  
〒569-1131 高槻市郡家本町5番5号 ☎ 072-685-3803 FAX 072-685-3805
- 地域生活支援センター光 (障がい者支援施設・放課後等デイサービス事業)  
〒569-1032 高槻市宮之川原2丁目9番1号 ☎ 072-680-1110 FAX 072-691-8300
- 聖ヨハネ子どもセンター (児童発達支援事業・放課後等デイサービス事業)  
〒569-1032 高槻市宮之川原2丁目9番1号 ☎ 072-687-7720 FAX 072-687-7722